令和６年度
総合教育センター
研究大会
教育相談チーム

- Ⅰ　研究主題
- Ⅱ　担当指導主事・アドバイザー
- Ⅲ　研究の概要・主題設定の理由
- Ⅳ　研究の目的と方法
- Ⅴ　研究の経過・取組
- Ⅵ　研究のまとめ

Ⅰ　研究主題

「有効的な
支援方法について」

-不登校支援事例の質的分析を通して-

- Ⅰ　研究主題
- Ⅱ　担当指導主事・アドバイザー
- Ⅲ　研究の概要・主題設定の理由
- Ⅳ　研究の目的と方法
- Ⅴ　研究の経過・取組
- Ⅵ　研究のまとめ

Ⅱ 担当指導主事 所内アドバイザー

山梨大学アドバイザー
青柳　達也
渡部　雪子
桐原 ひかる

所内アドバイザー
相談支援センター長　田中　一弘

担当指導主事
花輪　恭子
小野　　圭
佐野　青葉
松井　良子

Ⅰ　研究主題

Ⅱ　担当指導主事・アドバイザー

Ⅲ　研究の概要・主題設定の理由

Ⅳ　研究の目的と方法

Ⅴ　研究の経過・取組

Ⅵ　研究のまとめ

Ⅲ 研究の概要

3か年研究（R5～R7）

　昨年度は過去５年間に相談支援センター（教育相談担当）が関わった全事例の統計分析を行った。

　今年度は前年度調査から主訴の中で最も多かった不登校事例に焦点を当て、面接相談内容を分析する中で、有効な支援方法を探る。

Ⅰ　研究主題
Ⅱ　担当指導主事・アドバイザー
Ⅲ　研究の概要・主題設定の理由
Ⅳ　研究の目的と方法
Ⅴ　研究の経過・取組
Ⅵ　研究のまとめ

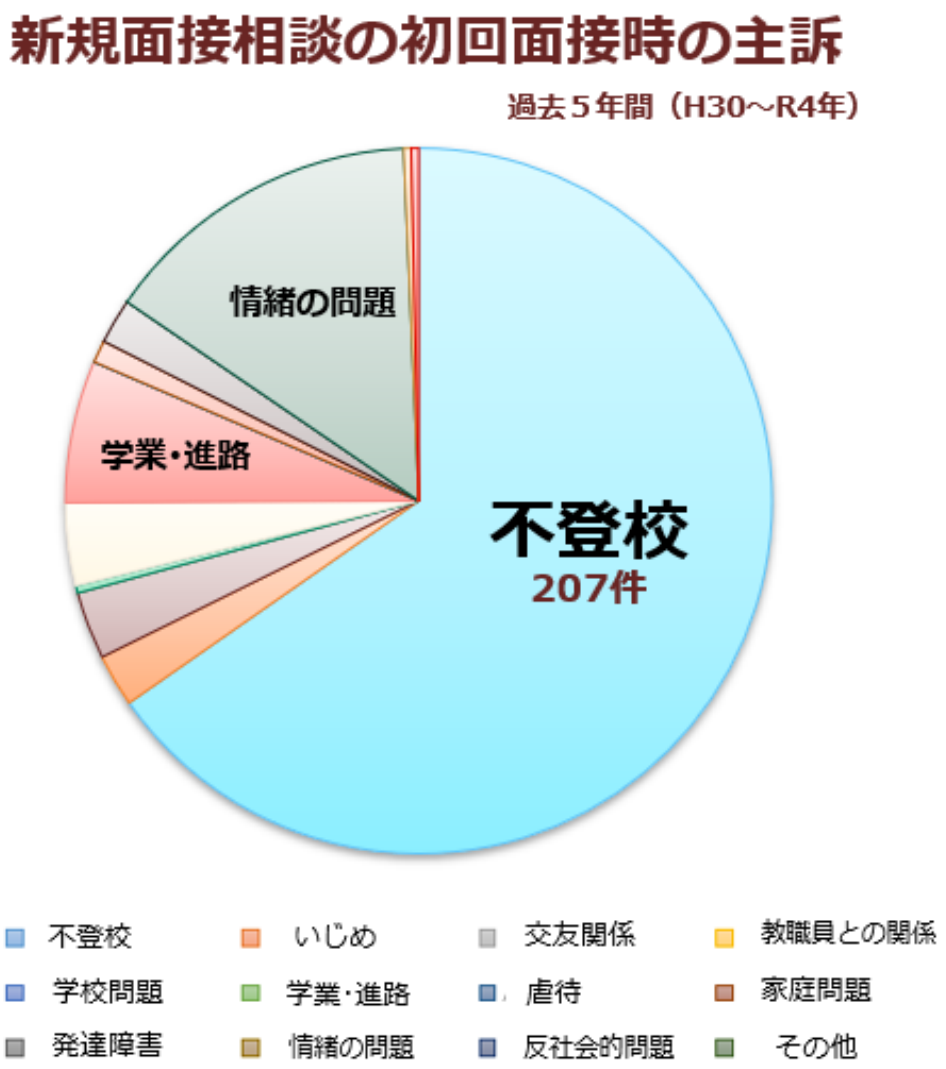
Ⅲ 主題設定の理由

　主訴の中で最も多かった不登校事例に焦点を当て、面接相談の内容から**保護者の心理的変容**のプロセスを調査分析することで、不登校児童生徒支援の手掛かりとしたいと考えた。

- Ⅰ　研究主題
- Ⅱ　担当指導主事・アドバイザー
- Ⅲ　研究の概要・主題設定の理由
- Ⅳ　研究の目的と方法
- Ⅴ　研究の経過・取組
- Ⅵ　研究のまとめ

Ⅲ　主題設定の理由

　主訴の中で最も多かった不登校事例に焦点を当て、面接相談の内容から**保護者の心理的変容**のプロセスを調査分析することで、不登校児童生徒支援の手掛かりとしたいと考えた。



保護者の心理的変容に着目する理由

不登校児童生徒への支援の目標は、**将来、児童生徒**が精神的にも経済的にも自立し、豊かな人生を送れるような、**社会的自立**を果たすことです。

（生徒指導提要第１０章　不登校　10.1.4 支援の目標，２０２３）

保護者が抱えるネガティブな感情を吐き出し、肩の力を抜くことができれば、児童生徒への**関わりが改善し**、結果的に**児童生徒に好ましい変化**がみられることもあります。

（生徒指導提要第１０章　不登校　10.3.4(5)家庭や保護者を支える，２０２３）

Ⅳ 研究の目的

3か年研究（R5～R7）

　今年度の研究は、**保護者の心理的変容**の段階に合わせた有効な支援方法を探ることを目的とする。そのため、不登校児童生徒の**保護者の心理的変容**が見いだせた事例を面接相談記録からピックアップし、先行研究を参考にしながらカテゴリー分けをして分析する。

- Ⅰ　研究主題
- Ⅱ　担当指導主事・アドバイザー
- Ⅲ　研究の概要・主題設定の理由
- Ⅳ　研究の目的と方法
- Ⅴ　研究の経過・取組
- Ⅵ　研究のまとめ

Ⅳ 研究の方法

1．　先行研究調査

2．　面接相談内容調査

①好事例の定義づけとピックアップ

②心理的変容言語一覧の作成

③カテゴリー分け

3．　成果と分析

＊本研究では、保護者の心理的変容が見取れる言語を心理的変容言語と表記して扱う。

Ⅰ　研究主題

Ⅱ　担当指導主事・アドバイザー

Ⅲ　研究の概要・主題設定の理由

Ⅳ　研究の目的と方法

Ⅴ　研究の経過・取組

Ⅵ　研究のまとめ

Ⅴ 研究の経過・取組

1．　先行研究調査

2．　面接相談内容調査

①好事例の定義づけとピックアップ
②心理的変容言語一覧の作成
③カテゴリー分け

Ⅰ　研究主題
Ⅱ　担当指導主事・アドバイザー
Ⅲ　研究の概要・主題設定の理由
Ⅳ　研究の目的と方法
Ⅴ　研究の経過・取組
Ⅵ　研究のまとめ

保護者の心理的変容の段階

不登校経験のある母親９名を対象とした＊**半構造化面接**により、母親の変化のプロセスに関する**28の概念**と**８のカテゴリー**が生成された。

（日本教育心理学会第６０回総会発表論文集，PE63，中山和香 他， 2018）

不登校の子どもをもつ保護者へのグループアプローチ（親の集い）に継続参加した母親の参加姿勢や会話内容、＊**半構造化面接**により、母親の子どもに対する認識の変化過程（**Ⅲ期６段階モデル**）を調べた。

（不登校の理解と支援のためのハンドブックｐ.256~259，伊藤隆，2022）

＊半構造化面接・・・質問項目は準備しておきながらも、柔軟な対話を可能とした面接、インタビュー

先行研究における心理的変容の段階

28概念8カテゴリー：中山,2018

1. 苦悩・混乱期
2. 衝突
3. 受容（前期）
4. 受容（後期）
5. 変化（前期）
6. 変化（後期）　子どもを尊重して接するようになる
7. 自己内省
8. 不登校経験後の不安

Ⅲ期6段階モデル：伊藤,2022

1. Ⅰ期　登校へのこだわり
2. 　　行き詰まりと諦め
3. 　　こだわりから解放
4. Ⅱ期　現状受け入れ
5. 　　子どもを一人の個として扱い始める
6. Ⅲ期　子どもの存在そのものを素直に喜べる

＊児童生徒への関わりが改善（生徒指導提要）

①好事例の定義とピックアップ

- 保護者と相談員の**ラポール（信頼関係）**が形成されている（面接相談**20**回以上）
- 保護者の**心理的変容**を面接相談記録データより見取ることができる
- 保護者の児童生徒への**関わりが改善**している

  ➡子どもを尊重して接するようになる　【変化（後期):中山,2018】
  ➡子どもの存在そのものを素直に喜べる段階【Ⅲ期（６):伊藤,2022】
- 児童生徒が**社会的自立**に向かって支援機関および教育機関と繋がりをもっている

  ➡対人交流・社会経験・学習機会の確保【田中, 2024 ,不登校対応研修講義資料】

①好事例の定義とピックアップ

- 保護者と相談員の**ラポール（信頼関係）**が形成されている（面接相談**20**回以上）

207件
過去５年間（H30～R4年）

➡ **20件（面接相談累計503回）**

- 保護者の**心理的変容**を記録データより見取ることができる
- 保護者の児童生徒への**関わりが改善**している
  - ➡子どもを尊重して接するようになる　【変化（後期):中山,2018】
  - ➡子どもの存在そのものを素直に喜べる段階【Ⅲ期（６):伊藤,2022】
- 児童生徒が**社会的自立**に向かって支援機関および学校と繋がりをもっている

⬇

５件（面接相談累計139回）

相談支援センター面接相談の概要

学校生活に関わって生じる様々な問題の解決に向けて、面接相談を通し、子供のこころの健康のための支援をしています

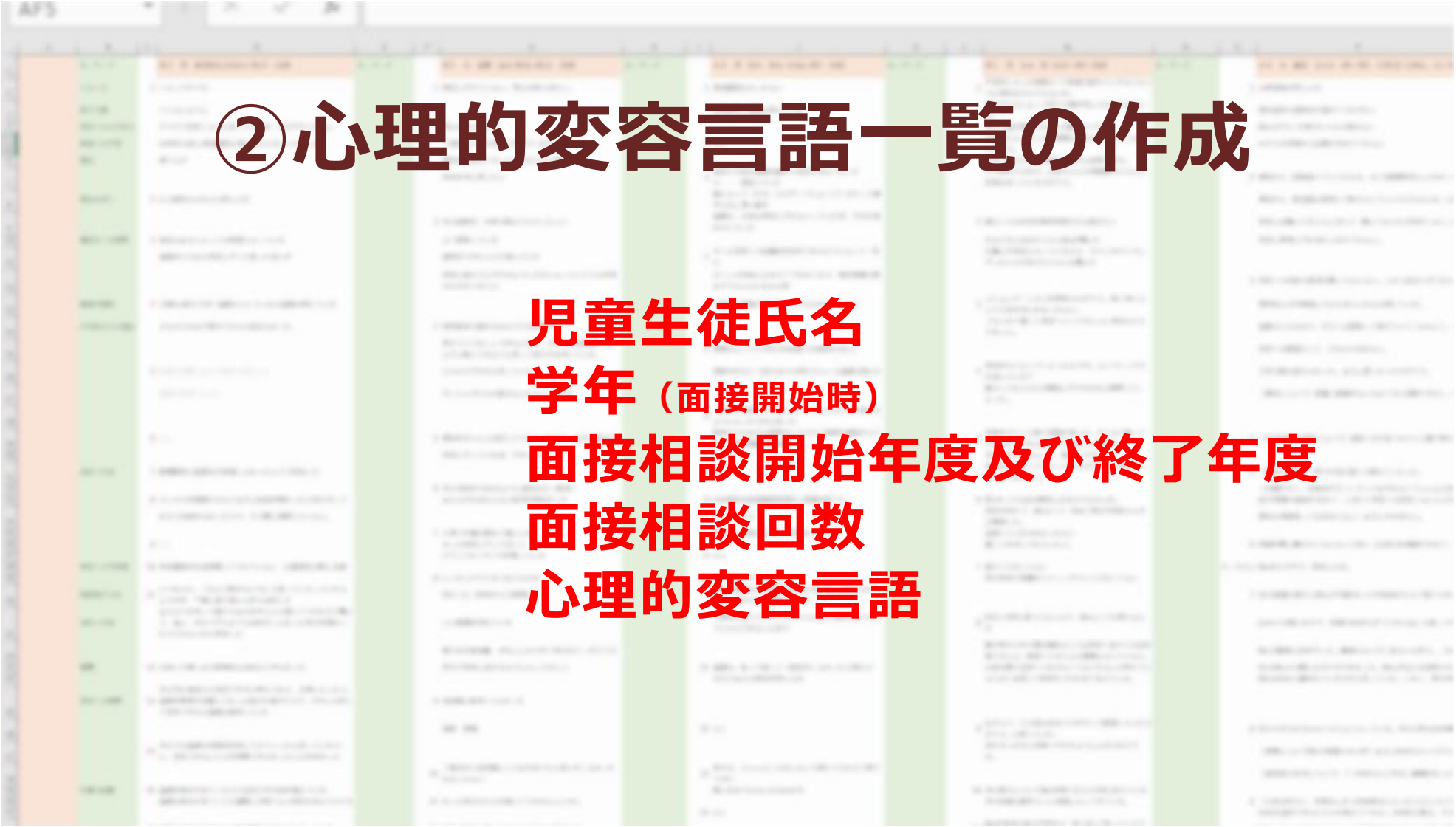
面接相談受付 → 受理カンファレンス → 日程調整 ⇔ 面接相談

小学校1年生～高等学校３年生
児童生徒と保護者対象

親子並行面接

初回９０分
２回目以降６０分

Ⅴ　研究の経過・取組　２　面接相談内容調査



②心理的変容言語一覧の作成

児童生徒氏名
学年（面接開始時）
面接相談開始年度及び終了年度
面接相談回数
心理的変容言語

③カテゴリー分け
心理的変容言語のキーワード化

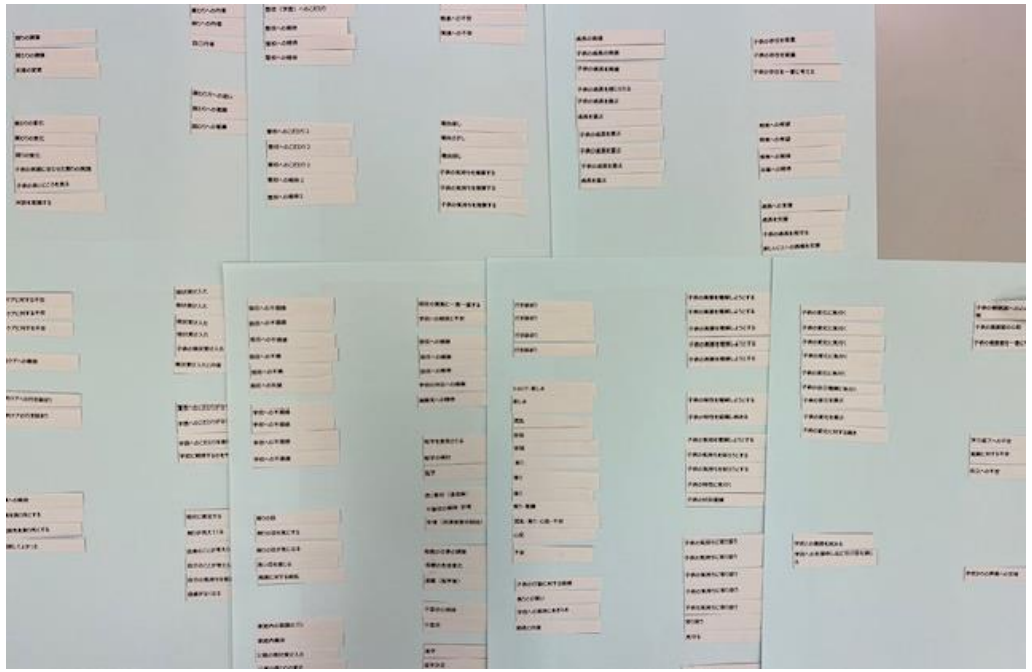
ex. そろそろ登校しようと思っているが、まだ行けていない。

↓

「登校へのこだわり」

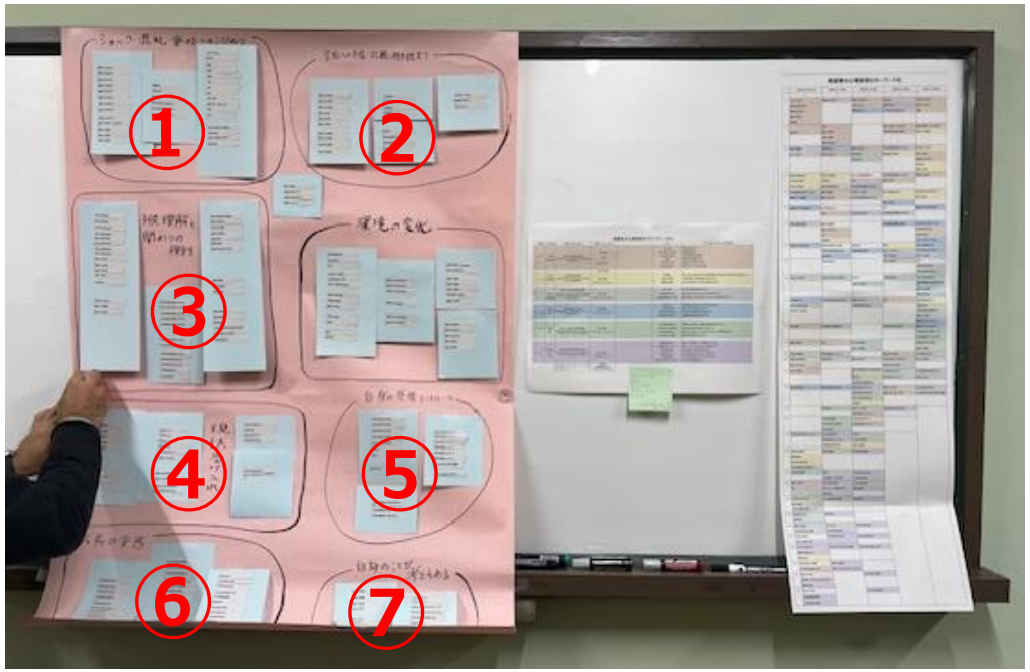
③カテゴリー分け
KJ法による分類

キーワードの分類



類似性で分類し、20の概念をピックアップ

カテゴリー分け



心理的変容の段階に整理

Ⅵ　研究のまとめ

1．　成果と分析
2．　研究を通して
3．　課題・来年度に向けて

Ⅰ　研究主題
Ⅱ　担当指導主事･アドバイザー
Ⅲ　研究の概要･主題設定の理由
Ⅳ　研究の目的と方法
Ⅴ　研究の経過･取組
Ⅵ　研究のまとめ

保護者の心理的変容７段階20概念

保護者の心理的変容の大きな流れ	概念	心理的変容言語
1　ショック・混乱期	ショック・混乱 登校へのこだわり 理由探し	何とかならないか　どうしてもイライラが募っている　プレッシャーをかけてしまう 学校生活に戻したい　出席日数が気になる　進学の選択肢を増やしてあげたい 不登校になった原因を知りたい　ネックは対人関係にあるのではないか　逃避しているのかもしれない
2　行き詰まり期	行き詰まり 学校への不信感 周りの目が気になる	どうしたらいいかわからない　親としてわからなくなってしまう　どう接していくことがいいのか これではもう学校に行かないと思った　怒りを通り越して呆れてしまった　切り捨てられた感がある 中卒が最終学歴だけは避けたい　職場の人に申し訳ないと思う
3　子供理解と関りの検討期	子供との関りへの内省 子供の実態を理解しようとする 関りの検討	余計な口をはさんでしまう　寂しかったり複雑な思いをさせたのではないか　どうしても欲をかいてしまう 自信がなくなってしまったようだ　もっと自分のことを話してくれるといいのに　もっと自分を出してほしい 刺激しないように触らない　とにかく肯定して自信をつけさせてあげている　会話する時間を増やしている
4　現状受け入れ期	子供の実態把握 現状受け入れ 学校との連携を試みる	先のイメージを持つことができるが、体が動かない時がある　独特のこだわりが発生している 以前は学校に行けといっていたが、それを言わなくなった　私が受け入れなければどうなると思っていた 親としてどうコンタクトを取ったらよいか・・・過保護と思われないか　子供の特性にあった指導を強く望んでいる
5　寄り添い期	子供の気持ちに寄り添う 自身の感情をコントロール 子供の健康面への心配	子供の気持ちに気づいた時は、話を聴いたり、対処を伝えたりしている　自分で考えて言ってきたことだから手伝おう 何かあったとき、悪いところが目に付くことが多いが、いいところを伸ばすことが大切　先週は自分との戦いだった 学校を無理する必要がないと伝えている　親として理解しなければと思っている
6　成長の実感期	子供の変化に気付く 子供の存在を尊重 子供の成長の実感	子供の笑顔を見る機会が増えたことを喜んでいる　以前は子供の発するサインに気づかなかった 子供の感情表現を肯定的に受け止めている 子供の生活は豊かになってきている　青春を謳歌しているようですよ　今では叱ることもできる
7　自尊期	将来への希望 自身のことが考えられる	将来のことも話題にしている　コミュニケーションをとれる友人ができるといい　あわてないで、時間はまだある 楽にお互いなった　いい時間が流れている　まずは自分が健康管理をしたい

相談支援センター面接相談における

保護者の心理的変容の７段階

＊面接相談利用保護者の心理変容の特徴

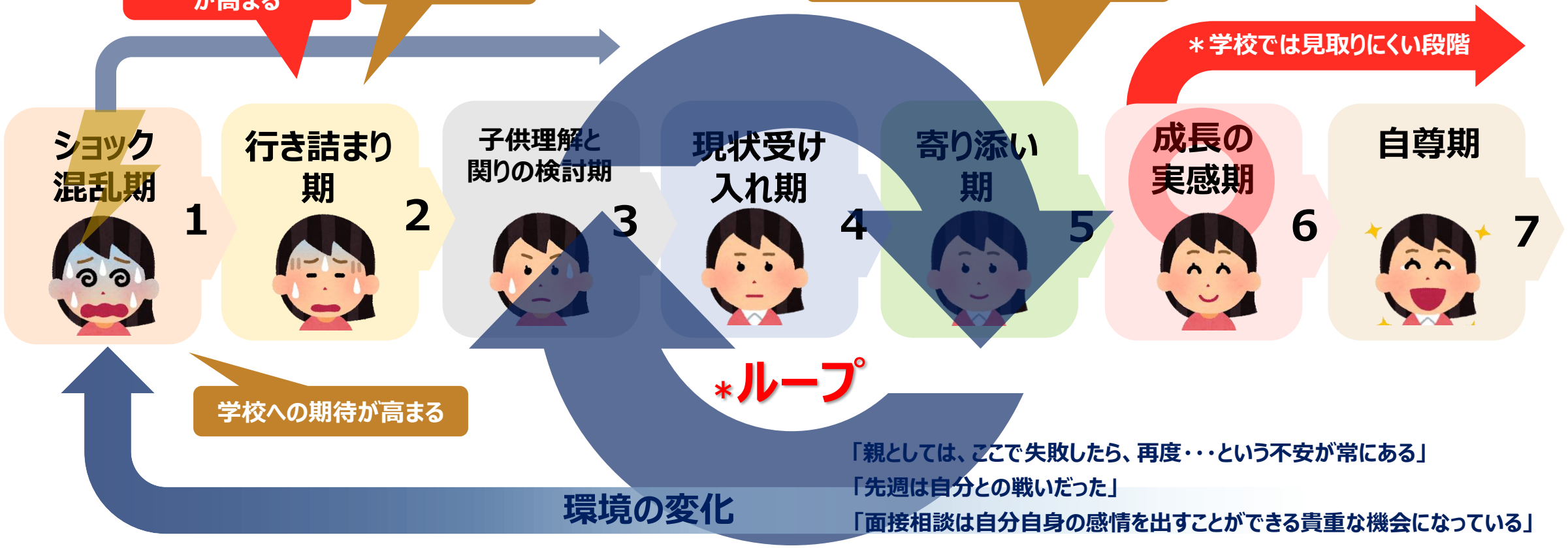
「親としてどうコンタクトを取ったらよいか・・・過保護と思われないか」

＊学校への不信感が高まる

面接相談開始

学校への要望が明確になる時期

＊学校では見取りにくい段階

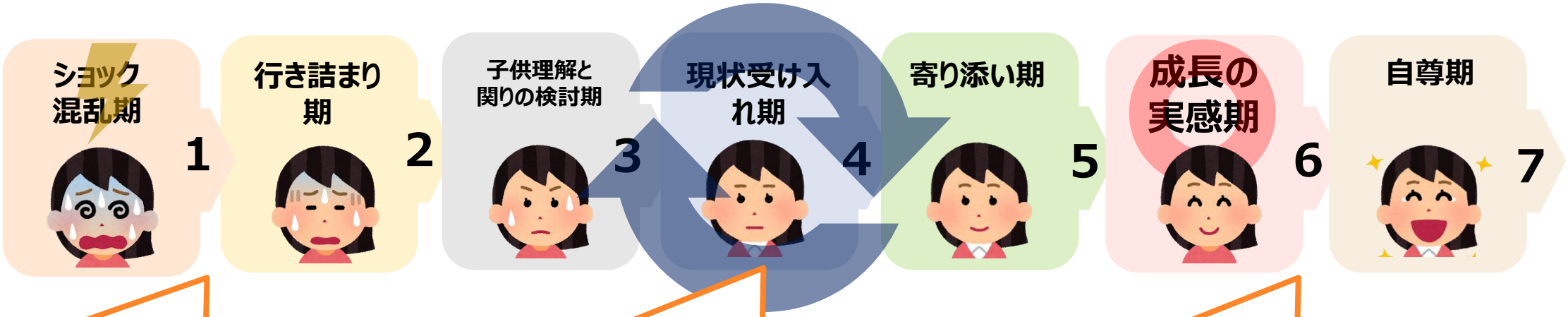


「親としては、ここで失敗したら、再度・・・という不安が常にある」

「先週は自分との戦いだった」

「面接相談は自分自身の感情を出すことができる貴重な機会になっている」

段階に合わせた支援を探る



保護者への寄り添い

学校の**初期対応**がうまくいかないと、**不信感**となって保護者の心理に大きく影響します。
子供だけでなく、保護者の**気持ちに寄り添う**ことも必要です。**SCや外部機関を活用**するなど、**チーム学校**で**早期に対応**することが支援の大きなカギとなります。

定期的な繋がりの担保

面接相談等によって保護者の内省が深まり、それに伴って子供理解と関わりが変化する時期です。保護者が子供の実態を把握していく過程で**学校への要望が明確になっていく**ため、**連携**がしっかり取れるよう、学校は保護者と**定期的なつながり**を保つ必要があります。

連携の継続

子供との関わりが改善しても環境の変化で一時的に不安や焦りといった心理状態に戻ることもあります。仮に再登校できたとしても、**保護者は常に不安を抱えている**ことを意識しておく必要があります。

Ⅵ　研究のまとめ　３課題・来年度に向けて

成果：相談支援センターを利用する不登校児童生徒保護者の心理的変容プロセスの特徴を明らかにすることができた。

➡相談支援センターでの好事例の保護者の心理的変化の特徴を理解することによって、不登校の子どもを抱える保護者への理解を深めるための指針としてほしい。

課題・来年度に向けて

本研究の目的である「保護者の心理的変容の段階に合わせた有効な支援方法を探る」の有効な支援方法を見つけるには、保護者の心理的変容の分析に加えて子供にも焦点を当て、研究をさらに深める必要があるだろう。